

文献紹介

鈴木祥蔵著「幼児教育入門」

右 島 祥 介^{*}

本書を通読してまず感ずることは、教育学の理論的探求者としての学者であると同時に学生や民衆に対する教師であり、そしてまた各種の民間教育運動や教育研究活動の指導者として大衆とともに現実の諸問題にとり組んでおられる著者の本領が如実にあらわれているということである。

著者は長年の間、幼児教育の振興とその正しいあり方のために、幼児教育界においても中心的な指導者の一人として尽力されてきた。¹あとがき、で著者自身が述べているように、本書は、そうした実践の過程で発表してきた文章を整理されたものである。したがって、今日教育界が直面している諸問題や、それらに対する親や教師のかかわり方や意識、あるいは、研究や運動の中で積み重ねられてきた成果や明らかにされてきた課題等をふまえて、教育論が展開されている。だから、ふつうの書きおろしの入門書や通り一べんの概説書にはない、生きた問題意識や迫力がこめられているのである。たとえば、第二編第三章「就学前教育としての保育」では、幼稚園と保育所が制度的に分断され、差別的な、あやまった幼児教育の観念が克服されないできている歴史的経緯にふれるとともに、著者が中枢のメンバーとしてかかわってきた同和保育研究会での成果をふまえ、すべての子どもがゼロ才からその全面的な発達を保障されるような保育の原則を述べている。そして「部落の子ど

もたちの学力が非常に低いということは、一般的・社会的条件だけで悪くなったのかというと、それだけではないと思います。その背後には、そのよう子どもたちにどのような援助をしたらよいかという、その手だてを明らかにしてこなかった点もあるのではないかと思います」というように、差別の克服に対する学者、研究者の側の責任をも、自らの問題として痛切に指摘されているのである。

さて、第一編は、「母親のための教育原論」とあるように、主として母親を対象として書かれたものである。第一章ではまず、子どもを単に、²「自分の子ども」としてでなく、人間としての発達を保障されるべき「社会的存在」としてとらえるべきことを、憲法や児童憲章、児童福祉法等の精神や理念に即して説き起している。第二章では、ポルトマンの「人間一年早産説」を紹介しながら、文化的環境が進むほどに、人間としての発達を促進するためのゼロ才からの文化的、教育的環境の重要な所以を明らかにし、第三章では主としてエンゲルスの「自然弁証法」を援用しながら、動物に対する人間の発達の特殊性、とくに言語と労働の意味や役割を述べ、子どもにとって遊びが労働にかわるものとして重要なこと、しかるにそのような遊び＝労働が今日では極めて乏しくなっていることを指摘する。そして第四章では、フランスの医学者であるルロン教授の著書により、子どもの養育が、医学・生物学・生理学・栄養学等の総合的な科

^{*}関西大学文学部教授

学ともいべき「育児学」の見地からいかになされるべきであるか、今日まで一般に考えられてきた育児法が「科学的」という考え方のもとに、かえって子どもの発達之法則や子どもの個性を無視した非科学的な方法に陥っていることがいかに多いかを指摘し、正しい育児法を示唆している。第五章では、ルソーの「エミール」を紹介しながら、職業や労働が社会的存在としての人間に対して有する意味や、子どもが自由な自律的な人間として成長するための教育観、人間観、社会観等に関して親たちに考えさせる機会を提供している。以下、第六章では、子どもの全面発達のための学校教育観について、第七章では、集団生活の教育的な意味について解説している。

第三編も、第一編と同様に、もともと親のための幼児教育誌に発表されたもので、第一編から見れば、やや各論的な文章(「しつけ」のあり方、オモチャや絵本等の与え方、自然観察やその表現の意味、など)が集められている。

第一編、第三編は以上のように、親たちに対する啓蒙書的な叙述であるが、単に既成の幼児教育理論を平易に解説したものではない。著者がたえず、古典的な遺産にくり返し学び、また新しい研究の成果を吸収しながら、新しい幼児教育理論を建設していこうとする研究生活の過程がこめられている。あるいはまた、教えることを常に自己の学ぶ姿勢にかえてきた著者の教育者としての基本的な姿勢があらわれている、ともいうことができよう。これらの文章によって、親たちは古典の読み方を学び、人間存在の意味を深く考えさせられ、保育や教育の基本法則に気づかされるのであって、いわば市民大学的な学習の場を提供されることになる。幼児教育についてはとくにHow toもの本が多い中で、親たちにとっては貴重な一書となるであろう。

う。

上記のような著者の基本的姿勢は、もちろん、第二編の「教師のための保育原論」でも変りはない。しかし、第二編では、現代の教育問題や幼児教育の問題に対する著者の問題意識やとり組みの姿勢が、より本格的に鋭どくあらわれている。第一章の「幼児教育の現代化」では、「教育の現代化」を単に内容・方法または技術の問題に矮小化することの誤まりを指摘し、「現代化」とは、科学の革新—技術革新—第二次産業革命—社会構造の全面的変革という視野での必然的過程として、学校制度、教育内容、教育方法、教員養成、教育行財政の各領域について展望され、検討されねばならないとする。それは、科学、技術の進歩—社会構造の変化を、働らく人民大衆の幸せを実現する社会進歩のための歴史的必然的過程として、そうした筋道で「現状の社会を乗り越えようとする意志と、未来を先取りしようとする意志がこめられている」ものとして、「現代化」の運動や研究にとり組もうとする著者の理想主義的な立場に由来するものである。したがって、第二章では、技術革新、高度成長に伴う様々な矛盾や公害—ディストピアの拡大の中で、それを克服するためには、反科学と技術否定の立場ではなく、真に人間の自由、幸福と人類の進歩をめざす科学と技術を確保しようとする立場に立たねばならない。すなわち、それぞれの専門科学が孤立して人間のための方向を見失った近代科学の立場でなく、科学の共同化乃至総合化による、いわば「人間化」への道をめざす現代科学の立場に立たねばならない所以が述べられている。

著者によれば、教育学とは、まさに、そのような現代科学の立場に立ち、総合科学としての理論と方法が建設され展開されるべき主要な分野である。「人間の全面的な発達の可能性は、人

類の歴史的・社会的な進歩と発展の過程ではつきりしてきた可能性」なのであるから、その可能性を「現実性」たらしめるための理論を明らかにする責務を教育学は負っている。そういう意味では、著者の教育学は勝れて「実践的」な教育学ともいうべきであろう。第三章「就学前教育としての保育」と第四章「教育（保育）における理論と実践」では、主として、保育者乃至教師としての実践の基本的な態度や原則が述べられるが、そこではあくまでも「教育（保育）理論と実践とは分離できないものであること、理論をもたない実践というものはない」という立場が貫かれているのである。教育学が「人間化」への道をめざす現代科学の立場に立つべきだと主張されているように教育（保育）の実践も、科学の立場と人間の立場との統一が求められている。教育（保育）実践とは、広義の人間の生産的行為の一環としての、あくまでも目的意識的な行為であり「科学性」と「芸術性」を兼ね備えたものでなければならない。「科学性」を著者の言葉で端的に言えば、「われわれが教育しようとする子どもたちが、それぞれにもっている人間としての本質を、全面的に開花してゆくその筋道に沿って、適当な指導なり、教え方なり、援助なりをしていくこと」であろう。そういう基本姿勢の上に、生きた教師と子どもたちが相互に働らき合いぶつかり合う中で様々な創造的な活動が展開されるのが教育であって、そこには「芸術の一回性」と同じような「教育実践の一回性」があるというのである。上記の「科学性」の側面、すなわち、子ども

が「人間としての本質を全面的に開花していく筋道」は、第五章「幼児期の人間形成」と第六章「子どもの知能と言語の発達」でより具体的に、科学的に明らかにされている。とくに第五章では、主としてポルトマンやマルクスの方法を援用しながら、人間の基本的な存在様式と発達の過程を説明し、人間が人間化するための労働と言語の役割の重要性を指摘していること、さらに、人間の諸機能（運動、感情、認識）の発達については、大脳生理学やワロンの科学的、唯物論的な心理学の研究成果をふまえて、自然決定論や自然成長論による発達説を克服し、子どもの発達における環境と教育の役割の重要性を明らかにしていることなど、学ぶべき点が多い。

以上の如く、本書は主として親や教師のために書かれたものだが、その所論は極めて原則的であり、ふだんの教育現象や日常的な保育や教育のあり方についてその基本原理や根本的な問題点をじっくりと考え直させるような内容にあふれている。だから、「幼児教育入門」ではあるが、教育学原論としての性格も十分そなえている。

最後に、著者の立場は一言でいえば、徹底したリアリズムの上に立った理想主義であり、唯物弁証法的方法が駆使されている、といえよう。だから、読者自身が、それぞれの教育現実や教育問題にあたっては、そうした著者の基本的姿勢や方法を学ぶことがだいじであろう。

（福村出版、1971年8月刊）